

2019年(第23回)研究助成 研究要旨

「抗菌薬適正使用に関する政策の、医師・患者(家族)の処方行動へ与える影響及びその医療経済的分析」

所属：京都大学大学院 医学研究科 社会健康医学専攻 医療疫学分野

氏名：神代和明

【研究の背景】

2015年5月の世界保健総会で、「薬剤耐性(AMR)に関するグローバル・アクションプラン」が採択され、2016年4月には我が国から「薬剤耐性(AMR)対策アクションプラン 2016-2020」が公表され、この中でヒトおよび動物の抗菌薬の適正使用・慎重使用を徹底させ、不必要な抗菌薬の使用を減少させることで耐性菌の出現を抑制することが明記され、大きな柱の一つとなっている。また、「薬剤耐性ワンヘルス動向調査年次報告書 2017」及び「薬剤耐性(AMR)対策アクションプラン 2016-2020」には、2020年までに外来診療でよく使用される経口抗菌薬の使用量を30%から50%減少させる数値目標を挙げている。この目標を達成するために、厚生労働省は抗菌薬のガイダンス「抗微生物薬適正使用の手引き」を出版し《医師教育》、患者・医師間でshared decision makingを行わせ《患者教育》、さらには加算を新設することで《医師へのインセンティブ》、抗菌薬の不適切な使用を減少させ、結果として全体的な抗菌薬使用量の低下につながるように工夫している。

表1 抗菌薬処方率の変化

Coefficients	IRR	95% 信頼区間 (下限値)	95% 信頼区間 (上限値)	P値
(Intercept)	0.0391	0.0390	0.0392	<0.001
Baseline	0.9977	0.9977	0.9978	<0.001
抗微生物薬適正使用の手引き」の出版	0.9191	0.9156	0.9227	<0.001
抗微生物薬適正使用の手引き」_トレンド	1.0004	0.9998	1.0010	0.1766
加算	0.9967	0.9931	1.0004	0.0807
加算_トレンド	0.9944	0.9938	0.9950	<0.001

【目的】

本研究は、「抗微生物薬適正使用の手引き」と加算によるインセンティブの経口抗菌薬処方率の影響をみた。

【方法】

JMDC データベースを用いて 2013年1月1日から2019年12月31日の間に外来で処方された抗菌薬を抽出した。

分割時系列デザインを用いて手引きや加算が新設される前後の抗菌薬処方率(=処方量÷外来受診数)と処方日数の変化の傾きをそれぞれ解析することで評価した。季節性も加味している。Incidence rate ratios (IRRs) 及びその95%信頼区間を求めた。

【結果】

研究期間中、384,804,501人がデータベースに含まれ、11,364,880の経口抗菌薬が処方された。「抗微生物薬適正使用の手引き」の上梓前に、抗菌薬処方率は減少傾向であった(IRR, 0.9977; 95% CI, 0.9977-0.9978; P<0.001)(表1及び図1)。上梓直

後には、処方率の低下が認められた(IRR, 0.9191; 95% CI, 0.9156-0.9227; P<0.001)が、持続的な減少に結びつかなかった。一方で、加算は、開始直後に変化は認めなかったが(IRR, 0.9967; 95% CI, 0.9967-0.9931; P=0.081)、持続的な減少を認めた。

2019年（第23回）研究助成 研究要旨

2020) 最終年になるが、本知見が来年度以降の AMR 対策に活用されることを期待する。

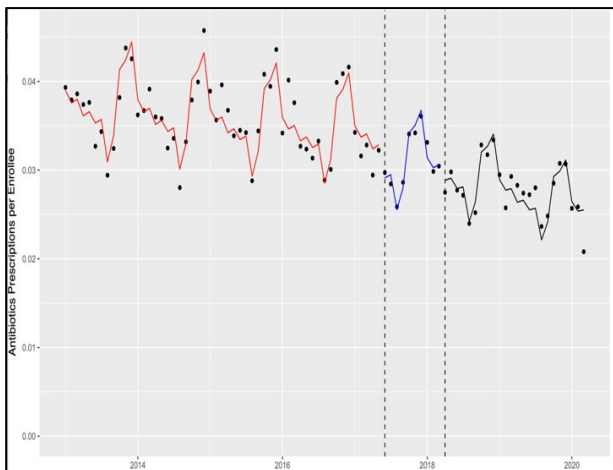


図 1 抗菌薬処方率の月毎の変化 (2013/1/1-2019/12/31)

点線は、手引き上梓のタイミング（左）、加算開始のタイミング（右）。横軸は年月、縦軸は抗菌薬処方率を表す。

【考察】

「抗微生物薬適正使用の手引き」及び加算は、抗菌薬処方率を減少させた。特に加算においては、持続的な減少をもたらし、手引きが直後の減少のみに影響を与えていることと対照的である。抗菌薬適正使用の介入では、持続的な教育、フィードバック、オーディットなどが有効とされており、いくつかの介入と組み合わせる介入することが重要である。また、一連の介入前から抗菌薬処方率は減少傾向であったが、それに加えて、加算がさらなる抗菌薬処方率の減少トレンドに影響を与えている。医療者に経済的なインセンティブを与えることで、国全体の抗菌薬処方を減少させる試みは、世界でも数少なく、この効果を持続的に評価していくことは重要である。

【結論】

本邦の、AMR 対策、特に医師と患者教育及び医師への経済的インセンティブに関連する施策の、抗菌薬処方の影響について分析した。これらは、抗菌薬処方率を減少させ、薬剤耐性菌の発生を減少させることを示唆した。本年は現行の AMR アクションプラン(2016-